

ある不妊女性のライフストーリーとその解釈

—「不妊」という十字架^Ⅱを背負って—

竹 家 一 美

1. 問題と目的

少子化が社会問題となって久しいが、2006年の合計特殊出生率（一人の女性が生涯に産む子どもの平均数）は1.32となり、6年ぶりに出生率の上昇が確認された。その主因は、景気回復による雇用改善で1971 - 74年生まれの団塊ジュニア世代を中心に結婚・出産が増えたためとされる（日本経済新聞, 2007/05/30）。これを受け実施された2006年に出産した30代女性を対象とした調査によると、1030人の回答者中13.8%が「不妊治療を受けていた」と回答したという（日本経済新聞, 2007/06/10）。少子化対策の一環として政府が不妊治療の支援を重点課題に掲げたことから、治療費を助成する自治体や治療のための休暇制度を導入する企業も登場し、不妊治療は確実に広がりつつある。先の調査では、隠蔽されがちであった不妊治療自体のイメージの変化や治療への抵抗感の希薄化が報告されており、不妊治療が子どもを産むための選択肢として意識され始めていることが裏付けられた。

不妊を対象とした研究は、不妊症患者の援助を目的に看護学で広く行われ、急速に進展した生殖医療の是非を問う視点から、生命倫理学や女性学などで議論が活発である。心理学においては、不妊は喪失体験と捉えられ、その対処法などが検討されてきた（例えばDunkel-Schetter & Lobel, 1991；Snarey, 1988）。竹家（2005）は、不妊治療を経て子どものいない女性たちにインタビューを行い、彼女たちが子どものいない人生を受容していく心理的プロセスの解明を試みた。その結果、不妊症患者である女性たちが、先の見えない不安に苛まれる日々において心身共に傷つき自閉的になっていく傾向と、治療断念後の人生設計を図るうえでの関係性や価値観の転換の重要性が明らかになった。現在の日本では、治療の終結が当事者に一任されるため、子どものいない人生の選択に繋がる不妊治療断念という決断は、当事者にとっては過酷なものとなっている。不妊治療における成功物語や生殖技術の進歩が喧伝される一方で、子どもを得られぬまま治療の場から降りていった女性たちの声は影に潜んでいる。ただし、子どもを望む夫婦にとって不妊治療をより受け易くする環境や制度の拡充が朗報であることに疑いはない。問題は、不妊治療を受けたすべての人が子どもを授かるわけではないということであり、それゆえ、治療後の人生を見据えた人生設計が困難であるということである。したがって、子どもをもたない人生を記述し、その不在の意味を明らかにすることは、成功物語の記述同様重要であり、時代的にも求められることであろう。その際、当事者の身になって経験の意味を捉え直すという視点が不可欠であると考えられるが、それを実現しうる研究手法の1つにナラティブ研究がある。

やまだ（2006）によれば、ナラティブ（narrative）とは、通常「物語」や「語り」と訳されるが「広義の言語^Ⅲによって語る行為と語られたもの」の両方をさす。そして、物語とは、「経

験を有機的に組織化する行為、つまり経験や人生を編集する行為」であり、絶えざる修正と生成による語り直し、構成と再構成の連続とみなされる生成的機能に特徴を有する。ここでは、物語は、語り手／著者だけでは完結できず、聞き手／読者によって新たな意味を共同生成される生成的で未完の開かれた物語として捉えられる。唯一の真理に支配されない、多数の多様な筋立ての両立を許容する「物語の複数性」にめざめることは、今までとらわれてきた生き方とは別の生き方がありえるし、生き方を変えようとする実践的で生成的な行為を促す。ナラティブ研究は、人びとの多声性と、それぞれが自分の声で語る行為を大切にはぐくむ（やまだ,2000）。したがって、当事者の思いを掬い取りたいという研究意図にナラティブ研究は有効であると思われ、竹家（2005,2007）ではナラティブ・アプローチが用いられた。10名程の研究協力者から「語り」を聴き取り、分析し、記述するという手続きである。ところが、研究を進めるうちに、逆説的ともいえる根本的な問いが生じてきた。それは、インタビューによって得た「語り」を分析し記述する際に、どこまで当事者の思いを掬い得ているのだろうか？という問いである。この問いは、遠藤（2006）の「現象の"リアリティ"を掬うとはいかなることか？（p194）」という問題提起に重なるものと思われる。実際のインタビューの場では、語り手から心の奥にしまっておかれた大切な秘め事を打ち明けられたり、心を揺さぶられるような深い感銘を受けたりする場合が少なくない。そのような貴重な「語り」は、まさにその人の「真実」であり「思い」であろうから、聴き手としては、何とかそれを漏らさず記述したいと願う。だが、複数の対象者から得た「データとしての語り」を分析する際には、そのような「語り」は抜け漏れてしまいがちである。なぜなら、そのような「語り」は個人に特有な一回性のものが多く類型化し難いからである。語り研究における語りの類型化は、語りの多様性を無視して特異なエピソードを切り捨て、安易に一般的な型に当てはめてしまう可能性をはらんでいる（江口,2001）。

筆者はこれまで、複数の対象者の語りをデータとして、個々人の物語に見出せる共通するライフイベントや心理過程に注目し発達のプロセスを検討してきた。しかし、上述した問題意識を鑑みると「個の完全性を厳密に保った上で、個々それぞれに対して質的な分析を施し、それぞれから固有のシーケンス等も含めた結果の固まりを得た上で、今度は複数人分の同様の結果の固まりを比較・照合しながら、全体的なパターンとして類似した複数の個の結果を束ね合わせていくという形の抽象化の方向性（遠藤,2006,p205）」の必然性は、看過できない。そこで本稿においては、筆者の語りデータの中からまず1名を採り上げ、その当事者の経験の意味づけをその人の身になって丁寧に生涯発達の観点から分析することを試みる。

よって本稿の目的は、不妊当事者である女性1名の語りを基にその人生を丁寧に記述し、その人生における不妊経験の意味を、できるだけ当事者の視点に立って解釈し理解することとする。

2. 方法

2-1. 研究協力者

竹家（2005,2007）における研究協力者のうち、不妊の当事者である女性1名の「ナラティブ」を対象とする。該当者9名中、本稿では「ユリさん」（仮名）のナラティブを分析する。ユリさんを選定した理由は、治療期間が長く（9名中最長）、治療断念時からの期間も長い（8～10年）ため、その間の経験が豊かで、心理面、行為面のいずれにおいてもその変化が興味深く読み取れ

ること、また、最年長者であるため、唯一更年期についてリアルに語っていることによる。

2-2. 対象ナラティブ

まず、ユリさんが筆者の研究協力者となった経緯について述べる。2004年初夏、筆者は不妊当事者の自助グループ内で研究趣意書を公表し協力者を募った。これは、筆者自身が当事者でありその自助グループのメンバーであったために了承された方法である。その際、申し出てくださった協力者の一人がユリさんである。数回のメール交換を経て、2004年9月に竹家（2005）のためのインタビューが行われた。その後は、時候の挨拶をメールで交わす程度の間柄であったが、竹家（2007）のために再び協力を依頼したところ快諾を頂戴し、2006年6月に2度目のインタビューが実施された。尚、ユリさんと直接面談したのはその2回のみである。

本稿では、この2度のインタビュー直後に筆者自身が書き起こしたトランスクリプトを用いてナラティブを分析する。とりわけ今回は、桜井（2005）が＜ストーリー領域＞と呼ぶ語りの相互行為を視座に置いた解釈を心がけたい。桜井によれば、ライフストーリーは＜物語世界＞と＜ストーリー領域＞という2つの位相から成る。前者は、筋（plot）で構成される語りをさし、主体は語り手である。他方、後者は、それ以外の評価や態度を表す語りをいい、主体は語り手と聴き手の相互性である。桜井は、ライフストーリーの分析や解釈には＜ストーリー領域＞における語りの相互行為の考察が不可欠であると強調するが、竹家（2005,2007）においては、この観点はほとんど欠落していた。それは、当事者の視点に立った経験の意味づけを把握しようとするあまり、＜物語世界＞にのみ関心が集中していたためである。だが、Holstein & Gubrium（1995/2004）が主張するように「意味はインタビューにおけるインタビュアーと回答者の出会いにおいて、両者が積極的に関わりコミュニケーションを行うことを通して組み立てられていくもの（p21）」であり、語り手は聴き手と共同しながらいま展開している解釈的な状況のなかで、自分の経験に意味を与えて伝えようとするアクティブな意味の作成者である。聴き手との相互行為によって生成された意味は紛れもなく当事者の意味であり、現象の"リアリティ"を掬う（遠藤, 2006）ことと何ら矛盾することではないと考えられる。したがって本稿では、聴き手である筆者の語りも分析対象に含める。そのうえで、それに対するユリさんの反応までが1つのシーケンスと捉えうる場合にはそのようにし、＜物語世界＞と＜ストーリー領域＞を分断することなく、両者を合せたライフストーリーまるごとの解釈を目指したい。筆者自身が不妊経験の当事者であることと、2度のインタビューの間隔が約2年あるということをふまえると、まるごとの解釈がいっそう重要な意味をもつように思われる。意味の共同作成者が同じ経験の共有者であるという事実と、2年という時間の積み重ねが＜ストーリー領域＞に及ぼす影響は不可避だからである。

2-3. 分析方法

本稿の課題は、個の完全性を厳密に保った上での質的な分析であり、個に固有のシーケンスを捨象することなく経験に対する個の意味づけを掬い取るというものである。そこで、文脈に対して鋭敏であることを方法論上の原則とする「シーケンス分析」（Flick,1995/2002）に則り、テキストにおける全体としての形（ゲシュタルト）により注意を払いながら分析を行った。本稿では、そのシーケンス分析の1つであるナラティブ分析の理論と手法（Rosenthal,1993）を参

考にした。ナラティブがその中に主観的かつ社会的な構築を含んでいる (Bruner,1987) という考え方に依拠し、事実のプロセスの再構成よりもむしろ主観的意味の分析に重点を置いて解釈していく方法である。桜井 (2005) は「語りの分析・解釈に標準的な方法があるわけではない」とした上で、物語の解釈に有用な「語りの種類」の類型化と「鍵になる言葉」の発見を紹介する。桜井が「語りの種類」として分類するのは、自己が経験した出来事についての「経験的語り」、事実関係のみを語る「報告」、事実の確認だけでなく何らかの根拠を示して事実関係を法的、一般的に把握しようとする「説明」、ほとんどが価値判断で占められている「評価」、歴史的伝承としての「伝説」と「民話」、そして特定の人物のエピソードを中心とした「逸話」の7つであるが、類型は必ずしもこの7つに限らない。要は、このように語りを類型化しておく、ストーリーの相互のつながりが明確になり、ライフストーリーの解釈にも役立つということだ。さらに、桜井は、語りに頻出する言葉やストーリーのコアになる観念を「鍵になる言葉」として重視する。桜井によれば、こうした言葉の発見はもとのテキストをわかりやすくまとめて理解・解釈する作業に役立つという。以上の知見を手がかりに、本稿で行なった実際の手順は以下のとおりである。

1. 2つのトランスクリプトを精読し、まずは全体としての形を見失わないように注意しながら全体の語りの流れをみる。物語を生成的で未完のものと捉える本稿では、両者は1つの物語とみなされる。よって、物語における意味的連続性を重視しながら<物語世界><ストーリー領域>双方について構造的にみる。
2. 語られた順番、特に聴き手と語り手の共同による継起順序 (シーケンス) の流れをみる。
3. 語られた量と「語りの種類」に着目し、語り手の人生の「鍵になる言葉」を見出す。
4. <物語世界>を中心に「筋」に基づく“現実”に即した年表を作成する。
5. <ストーリー領域>の「評価」や「態度」等の語りにも注目し経験の意味づけを分析する。
6. ユリさんのライフストーリーを再構成し、解釈する。

3. 結果と考察 - ユリさんの人生、およびその解釈

2つのトランスクリプトを精読し、その全体を語りのシーケンスに注意して構造的にみると、『治療をやめるまでの物語』と『治療をやめてからの物語』、そして『人生をリスタートさせる物語』と『未来へ続く物語』の4つのまとまりが見出された (図1)。言うまでもなく、語りは矛盾や亀裂をはらむものであり、2度のインタビューの場でも、同一事象の語り直しや繰り返しは当然あった。だが、それこそが物語の生成的機能である。「トボス (場所)」における「むすび」によって、新しい意味が生成されたり、ズレによって変異することが、物語には本質的に重要なのである (やまだ,2006)。ただし、ユリさんのナラティブの<物語世界>は、ほぼ一定である。矛盾や不整合が生じるのは、<ストーリー領域>においてである。つまり<物語世界>における「筋」は、ほぼ事実としての“現実”であり、変化するのはその現実に対する「評価」や「態度」、すなわち「意味」である。既述したように、語り手と聴き手の相互行為によって意味は産出されるのだから、<ストーリー領域>が可逆的で非一貫的なのは自明であろう。尚、分析の結果、固着的な「語りの種類」として「引用」が見出された。これは書物や他者の言葉を引用しつつ自身の考えや価値観を表明する語りであり、ユリさんのナラティブに頻出する語りであった。

3-2. ユリさんにとっての不妊経験の意味

以下、図1のシーケンスに沿ってナラティブ(□で囲んだ部分、Yはユリさん、rは筆者の発話、右上「」内のローマ数字は図1の物語番号に対応。語りの内「囲み」言葉は「鍵になる言葉」、下線は特に印象的な部分)を例示しながら、ユリさんのライフストーリーを再構成し、経験の意味づけを考察する。

I-i 治療をやめるまでの物語

ユリさんは、結婚を機に子宮内膜症^{iv}の治療のため婦人科を受診、そこで突然不妊を宣告される。特に子ども好きというわけでもなかったが、そう言われて初めて子どもが欲しいと思った。

r:治療を開始された時の気持ちって、今考えるとどんなでしたか。 [I-i]
Y:やっぱり…やっぱり暗たんたる気持ちで…、どうして私がこんな経験をするんだらうっていうことと、
自分がすごく…ひどく特別な、特殊な人間にされてしまったような、されてしまったのかなという意識
があって、うーん、自分ではそれがすごく大きかったですね。

自分(たち夫婦)の不妊を知らされ、落胆し困惑した後、その事実を受け止めて不妊治療を選択した人は、治療に対して希望と決心を抱くのが一般的だ(Blenner,1990;竹家,2005)。しかし、ユリさんの語りには最初から希望は見えない。「特殊な人間にされてしまった」との語りから、スティグマ化された自己を表す被害者意識が読み取れる。治療の実態は手短な「報告」の語りに終始し、それによると、治療期間は7年弱、療法はタイミング法^vや人工授精^{vi}の繰り返しであった。

Y:私がずっと考えていたのは、やっぱり自分は何のためにここに生まれてきているのか…。子 [I-i]
どもを、遺伝子を残すっていうのは、生命としての一番すごく大きな仕事なのに、それが私はできない
ということに、できないのにここに生きていていいのか、とかって思っていたんですけど…(中略)私
はほんとに人に言えないで、自分だけで考えてきたって感じですね。だから、死ぬほど考えたというか…
うーん…(黙考)。

上記は、ユリさんが不妊治療を通して自己と対峙している語りである。彼女は、遺伝子を残すことが生命の最重要責務であると考えている。ゆえに、それができない不妊としての自己のあり方を問い続けるのである。自己の存在価値を「死ぬほど考え」ながら、ユリさんの不妊治療は終息へと向かっていた。

I-ii 治療をやめてからの物語

r:何年も続いたってことは、これでやめようというふうには、なかなかならなかったわけですね? [I-ii]
Y:そうですね。本当にもういいわって思ったのは、40過ぎてからです。
r:やっぱり40っていうのは、一つの区切りですか?
Y:うん、区切りですけど、だけどその後も何年もやっぱり揺れましたね。本当に感じなくなったのは、こ
こ2,3年、45くらいまでは揺れ動きし…でもやっぱり私が思ったのは血を分けるとか 遺伝子を残す こと

が生物としての責任で、鮭 だってああやって、全部の 鮭 が遺伝子を残せるわけじゃないけど、ああやって孵化してるってことはそれはそれで意味があるし、自分がこうやって考えたり苦しんだりすること だってそれにはすごく意味があって、それは自分が通る1つの生物としての責任がそこにあるんじゃないかって思ったりしたんですけど

治療は断念したものの揺れ続けるユリさん。ここで彼女を救う「鍵」は、鮭 であった。一般に不妊治療の経験者が遺伝子に拘るケースは珍しくないが、「鮭」という言葉は奇異な印象を与える。後述するが2度目のインタビューでもユリさんは「鮭」という言葉を用いた。おそらく彼女にとって「鮭」は遺伝子を残すものの象徴（鮭は産卵シーンが有名）なのだろう。遺伝子を残せないことで自己評価を下げていたユリさんだったが、それについて苦悩すること自体に意味があるというふうに価値づけることで、自身の不妊に折り合いを付けようとしていた。

ユリさんの語りによれば、治療をやめたきっかけは「再就職」である。40歳になる頃、不況の折から夫が失業し自身が働かなければならなくなった。経済的にも物理的にも治療継続が困難な状況に陥ったが、結果的には「これが良かった」と評価する。これは逆に、治療の長期化を否定感視しつつも、自ら治療を中止するという決断の難しさの表明であろう。

Y:何となく自然に、(子どもは)もういいかっていう感じですね。いいかっていう感じなん [I-ii] ですけど 空虚感 みたいなものが全然消えなくて。なんて言うのかな、不妊 っていうのは生物学的な1つの死だけれどもでもやっぱり社会的にはね、それは死ではないんだって思うし…割とね、頭で納得すると7割近くはある程度納得できる感じなんです。だけど30%の 空虚感 っていうのは、どうしてもやっぱり埋めることはできなくて40…そうですね、5,6になるまでずっと引きずっていて、たぶんこれはやっぱり、私が死ぬまで、十字架 じゃないけど、持ち続けて自分でケアしながら生きていくしかない んだろうなって思っているんですけども

ここでのユリさんは、不妊という経験をどのように位置づけたらよいか模索している。そこには、「現実」から離れた彼女の真実の声が表れているように思われる。鍵になる言葉は、空虚感 と 十字架 である。「不妊治療をやめた」という現実があって、「子どもを諦める」という筋書きがある。その筋に彼女も同意しつつ現実を生きている。だが一方で、心の内には空虚感が存続する。遺伝子を残せなかった空虚感、7年も治療したのに報われなかった空虚感など、様々な空虚感が錯綜することと推察されるが、いずれにせよその源が不妊にあることは間違いない。治療をやめても不妊の経験は消えない。むしろ「十字架」という言葉には、不妊としての自己を見つめながら、不妊と共に生きるという諦念的な決意が潜んでいるように思われた。

Y:『海からの贈り物』っていうリンドバークの奥さんが書いている本があって。そこで、青年 [I-ii] 期っていうのは閉塞感とか限界感とかを感じて、たぶん喪失感もそうだと思うんですけど、リンドバークは、死の前兆だと思って私たちは耳を塞ごうとしているって言うんですよ。だけどそれが「お告げの天使」だってことには気がつかない。じゃあ何を告げるのかっていうと、次の輝かしい段階へである、ってことで、自分はそれまでのいろんな囚われ、それはその人の人生によって違うと思うんですけど、子どもに拘っていたり子どもの受験に拘っていたり、いろんなものから1つ自由になる次のステージへの、ステージを知らず「お告げの天使」だって彼女は書いていて。私も自分のことをそういうふうに捉えているんですね。

だからやっぱり、危機の後に安定が来てっていう、1つの安定期、自分の「移り変わり」があるという気がしているんですよ。それでやっぱり、それがお告げの天使であると感じられるということは、たぶん自分がそこで右往左往して苦しんできて、やっぱりその苦しみに比較的こう…正直に見つめてきたから、その言葉に反応できるんだろうし、今の自分を良い状況にあって捉えられるし、私はそういうふうによくポジティブに考えているんですけども。

これは、ユリさんが不妊と向き合ってきた過去を評価し現在の自己を肯定する語りである。今自分は、次のステージへ移行しつつあると感じながら、苦悩していた過去を意味づけている。

この後、語りは<物語世界>へと移り、人生物語の筋へ戻った。ユリさんは結婚情報会社勤務の当時、未婚の男女と関わる仕事に意義を見出していたが、物語は次の語りで締め括られた。

Y：できれば私、もっと病んでる人の「援助」をしたいっていう気持ちがあるんです。不妊で苦しんでいる人とか、ちょっとこう危機的な状況にいる人に「サポート」するとか、そういう仕事をしたいっていう気持ちはありますね。

II-i 人生をリスタートさせる物語

2度目に会ったときユリさんの人生は再び動き始めていた。臨床心理士になる決心を固め退職し大学院の受験勉強に専念していたのだ。物語は転回していたが、前回の結びは今回の始まりを暗示し一貫性はある。決意の背景には2つの主因があった。1つは重要な他者―“先生”の存在、もう1つは他者へのケアを志す心性―ケア志向性である。

Y:10年来(読書会で)月に1度会っているの、その「先生」が励ましてくださるのは、すごい力づけられました。結婚して子どももできずにカルチャーセンターにでも行こうかって、その流れで「先生」に出会って。

r:その先生には、不妊の悩みとかも話されていたんですか？

Y:そのために会っているわけではないんですけど、やっぱり話の途中でそういう会話が出来ますし、「先生」のお嬢さんも、相手が不妊症だったっていう経緯があって、「先生」の抱える苦しみでもあったんですね。だから、私が言うこととお嬢さんが言うことと本当に似ているって言って…やっぱり二人にとってはすごく意味のある…私だけではなくきっと「先生」にとっても…

ユリさんにとっての「先生」は、メンターであり母親のようでもある。彼女は、幼少期から母との間に確執があり、いまだにそれは続いていると語るのだが、一方で、寂しさも感じている。“先生”と交わした不妊の悩みや生き方の相談などは、本来は母親に求めたかった事柄なのかもしれない。

Y:私は子どもがいないからこそ何か「空虚さ」を感じて。で、その「空虚さ」っていうのは子どもが手を離れて独り残された時の、「空の巣症候群」とやっぱり似てるんだろうと思ったんですね。で、私はその「空虚さ」っていうのを、普通の人50代で感じるのを30代で経験したなと思うんですよ。だからこう、普通の人より先んじて考えられたんじゃないかなと思うんですね。だからもちろん、自分の生活を脅かすことのない範囲で、「誰かのために何かをする」っていうのは、ひょっとしたらこれって、悪い方向ではな

いだろうし…

r:そういうことを強く考えるようになったのは、ここ数年ですか？40代の初め頃は、それほどでもなかった？

Y:全然。全然っていうか、その「空虚さ」は感じてたんですね。「空虚さ」っていうのは、自分の子どもを育てることがない「空虚さ」ですよ。それは感じてたんですけど…（考）だけどそれが、誰かのために何かをする っていう方向には繋がらなかったような気がするんですよ。

r:そこにいくまでのプロセスの、何かいろいろ、段階というか、プロセスが必要だったんですね？

Y:うーん、外からいろいろ教えてもらったり、やっぱり自分が年を重ねて何ができるだろうかって思ったり、時間がない焦りもあるし。そして何かをしたいっていうか、手に入れたっていうか、何かをしたいっていう方向性は、少しシフトしたのかな…っと思うんですね。

この語りの直前、ユリさんは、ゲーテの『ファウスト』と最澄の「自利利他」という言葉を引用し、「自分のためだけにじゃなくて誰かのために働く」ことの重要性を語り、自身の変化プロセスと結びつけた。今や「空虚感」は、ケアの源泉に変容していた。「ケア」はアイデンティティ形成にともなう関係性の最も成熟した次元であり（Josselson,1994）、成人中期の自我と生命力を高めるもの（Erikson,1964）とされる。不妊と向き合っていた頃「誰にもケアされない」と孤独の渦の中にいた彼女が、他者のケアを志すまでに変わったのは「時間」の力が大きい。岡本(2002)は、中年期の特質を、過去の体験が有機的に統合されより深い次元でその意味が了解されることと、人生の有限性を認識し真に意味のある生き方を問うこととしている。ユリさんも、治療断念からの「10年間」に実存的意味を問い直し、この中年期の特質を具現し始めたのではないだろうか。

II - ii 未来へ続く物語

Y:『夜と霧』ってありますよね？ r:ええ、あのフランクルの？ Y:あれを読んですごい感動し [II - ii] たんですね、やっぱり「希望」をもつっていうか、「希望」を持つことってすごく大事なんだって（中略）あの一、若い人に伝えたいこと？今思うんですけど「どんな状況でも「希望」は見出せるのよ」ってことは伝えたいなとは思いますが。そう、諦めるにしろ、「希望」はまだまだ絶対あるよってことは…

r:自分が30代の頃、治療されてた時、「希望」とかってことは思っていましたか？

Y:うーん、あんまり意識してなかったでしょうね。若い頃は、目の前がストンと閉じられたら、先がもう想像できなかったんですよ。子どもができない、あっもう駄目だ！それでもう、すべてが、不幸の烙印を押された。

r:何もかも駄目だってなっちゃって？ Y:何もかもってなっちゃって！ r:若い頃こそいろんな道があるんだけど… Y:あるんだけど、わからないんですよ。 r:わからない！わからない！ Y:ですよね!!

語り手と聴き手の間には30代での不妊治療という経験の共有感がある。一般には年齢を重ねるほど選択や可能性の幅は狭まると思われがちだが、ここでは中年期以降の幅の広がりや語られた。このポジティブ感、次の更年期に関する語りにも現れる。ユリさんの「閉経」に対する感覚は独特で、何度も繰り返される「母ではなく女」というフレーズには、不妊としての自己を同定す

る複雑な思いが包含されているように思われる。閉経は悲しさ以上に女性性からの解放をもたらす。もしかすると、不妊からの自由さえもたすかもしれない。彼女のイメージでは、子どもを産んでも産まなくても女性はみな、更年期以降「一人の人間」になって上昇していくからだ。

Y: 閉経 っていうのは、やはりすごく悲しいんですけど、何かこう、決してネガティブなだけで [II-ii] はないんだって感じがなくて。何て言うのかな…ずーっとこう、女っていうペルソナ、これしか持ってなくて、母っていうのがないわけじゃないですか？

r: そうですね、子どもがいないからね。

Y: 子どもがいないから母ではなかったわけですね。だから、女っていうのをずっとなんかしょいこんで 生きているような感じがするんですよ。それで、それが、すごく ポジティブ なことを拡大して言えばなんですけど、それは年をとっていくのは悲しいんですけど、女っていうのを置いて一人の人間として見られるような、軽さはちょっと感じられますよね。

r: なるほどね…ちょっと殻を脱ぎ捨てられるみたいなの？

Y: うん、脱ぎ捨てられる。なんか、♀（メス）ってこう○（マル）に十（ジュウジ）になってますけど（手文字を描きながら）、この十の部分が取れて○になるような、イメージで言うとね。すごく ポジティブ に拡大して言えば、こんな感じで少し軽くなって、なんかこう上昇していくようなイメージがないでもない。だから、オスの方に近づくんだけど、もう少し上の方に、斜め上に上がっていく感じ。やっぱりこう…母としていらなかった分、女ではいたみたいない気がありますよね。

最後に子どもの不在について語り直しを促した。不妊を「十字架」とみなすユリさんは、それを背負いながら、さらには老いをも統合しながら生きていく覚悟を語る。

r: 今は、自分に子どもができなかったことは、どんなふうに思いますか？ [II-ii]

Y: うーん（考）まあ良かったとは思わないですね。良かったとは思わないけど、やっぱり自分が乗り越えなければならなかった大きな障害だし、十字架…背負わなければならなかった 十字架 だったし、今もたぶん背負っていると思うんですけど、これをやっぱりきちんと背負うことが私の運命だし、背負いながら生きるのが自分の人生だと思うし…だからそういう意味では、まあ自分の荷物の1つに前よりもなってるんだと思います。

r: それを背負ったまま行動していくんでしょね。

Y: そうなんでしょうね。

r: それをどっかに放り投げたりとか、捨てちゃうことはできない？

Y: うん…そうでしょうね。

r: やっぱりそれを、自分の経験として見つめていく、否定することはできない？

Y: だからその、統合 っていうのは、その自分をこう誰かに、自利利他 みたいに誰かに働きかけることでもあるし、自分のネガティブさとか老いとかを自分のものとしてしょってくことでもあるし…（中略）老いと不妊と両方をやっぱり自分のものにしていかなきゃいけないのかなって感じがしますね。

この語りの後「遺伝子が残せないことは、もう気になりませんか？」と問いかけると、「気になりますよ！気にならないってことは死ぬまでないと思う」と強い口調で言い切った。

r: 遺伝子も残せず自分の姿形もなくなる。でも、何かは残せると思いますか？残さなくてもいい？ [II-ii]

Y: 残さなくていい、残す必要もないと思うんですね。でも…私すごくね、鮭 が、何か 鮭 に救われたと
いうか（笑）

r: なんか、前もその話されてるんですよ、鮭の話！

Y: 鮭 もそうだし、なんか、動物って自分の子どもが残せなかったら、自分の姪とかを一生懸命可愛がる
行動をとるんですって、それで…それでいいんだと思うんですよ（中略）だから、残せないから誰
かのために 自分の時間とか、能力とかを提供したいって思うわけだし。やっぱり、死ぬ時に満足して死
ねたらいいって。

満足して死にたいという願望は、利己的な自己満足を表すだけの語りなのだろうか。先述した Erikson (1964) の「ケア」は、中年期の危機とされる「生成継承性 対 停滞」の拮抗の末、前者が上回った時に生成される力である。生成継承性とは「新しいものを生み出す力、生み出したものを世話し、次世代へとつなぎ継承していく力」と定義され、自分が大事で自分を生かしたいという自己愛と他者のために生きようとする利他主義、両者のパラドックスを含む概念である（やまだ，2000）。同様に、ユリさんが引用した「自利利他」も「自らを生かし他者を生かすこと」という最澄の概念である。この観点から、ケア志向性と自己満足は共存しうると考えられる。

ユリさんは「不妊」という十字架を背負いながら希望に支えられ未来へ進む。不妊の経験は、彼女の中でケア志向性の源泉として意味づけられ、新たな物語を紡ぎだす力に変化したのである。

4. むすび

たった一人を対象にその人生を解釈し記述することは、筆者にとって初めての試みであっただけに、本稿を通じ多くの気づきと示唆を得た。最後にそれをまとめ、むすびにかえたい。

まず、複数を対象とする研究と異なり「語り」や「生き方」などの類型化に囚われないので、具体性や個別性が保たれた。例えば「十字架」や「鮭」などの象徴的な言葉や、語りの種類としての「引用」は、過去の論考では記述し得なかったユリさんの独自性である。また、語りをデータとして切片化することなくシークエンス重視の分析をしたことで、個人の人生をより包括的に明示することができた。その際、できる限り物語的（意味連続的）な区分を心がけたので、ゲシュタルトが生かされ、人生物語全体における個々のナラティブの意味が捉え易くなったと思われる。語られた順番や語られた量の多寡は、経験の組織化と無関係であるではなく「いま－ここ」でのインタビューの場における意味づけの重要な手掛りになった。なぜこの順番でこれだけの量を語るのかという問いは、その経験の重さや意味の深さに迫る視点になる。聴き手の語りも含めたライフストーリーまるごとの解釈は、インタビューの相互行為性を再確認させ、「いま－ここ」での現実構築と意味生成への理解を促した。

たった一人のナラティブを分析してみると、これまでいかに多くの貴重な語りを捨象してきたかということが実感される。1つのライフストーリーの中には4つの継起的な物語があり、鍵になる言葉だけを追っても非常に興味深い変遷が見て取れた（図1参照）。例えばIの物語では、iでもiiでも「遺伝子を残す」ことに執着しているが、II-iiでは「（遺伝子を）残せないから誰かのために」と変わっている。その間のII-iでは以前から存続していた「空虚感」が「自利利

他」の源泉となり「誰かのために何かをする」という語りが生まれている。「鮭」という言葉も物語に生き続けているが、これは過去の経験を意味づけるだけでなく、新たな人生を後押しする力にもなっており、極めて重要な言葉である。他方で、「十字架」という言葉は同じ重みをもってⅠ、Ⅱともに語られている。ユリさんは、治療断念から何年たっても「不妊という十字架」を背負って生きていくと語る。ケアに新たな生きがいを見出した今の彼女は、竹家（2005）で記述した「喪失を生成へと変容させた」人であり、生涯発達の観点からは発達・成長の方向に向かう人として捉えられる。無論、それを否定するものではないが、過去の経験を忘れず人生を生き抜くこともまた、1つの発達・成長のあり方といえるのではないだろうか。なぜなら、それは過去の自分を評価すると共に、現在の自分を支える自己肯定感にも繋がると思われるからである。対象を単一事例にすれば、その人の人生を深く掘り下げてみることができ、語りを細かく丁寧に解釈することができる。「当事者の思いを掬い得たい」とする研究意図からみれば、本稿での試みが、従来の筆者の研究スタイルを凌駕したことに疑う余地はないと思われる。

今後はユリさん以外のナラティブについても同様の分析を施し、遠藤（2006,前出）が指摘した方向での抽象化を検討したい。同時に、個別事例のみを扱う場合にも単なる個性記述的研究に終わらない何らかの形で一般化（やまだ,2006）を可能にする研究を目指したい。それが、自己と他者を結び付け、相互理解や次世代への教育的営みに寄与するものになりうるからである。

引用文献

- Blenner, J. L. 1990 Passage Through Infertility Treatment: Stage Theory. *Image Journal of Nursing Scholarship*, 22(3) . 153-158.
- Bruner, J. 1987 Life as Narrative. *Social Research*, 54, 11-32.
- Dunkel-Schetter, C., & Lobel, M. 1991 Psychological reactions to infertility. Stanton, A. L., & Dunkel-Schetter, C. (Eds.) *Infertility: Perspectives from stress and coping research*. New York: Plenum. Pp.29-57.
- 江口重幸 2001 精神科臨床になぜエスノグラフィーが必要なのか 酒井明夫・下地明友・宮西照夫・江口重幸（編）文化精神医学序説一病い・物語・民族誌 金剛出版 19-43.
- 遠藤利彦 2006 質的研究と語りをめぐりいくつかの雑感 能智正博（編）〈語り〉と出会う一質的研究の新たな展開に向けて― ミネルヴァ書房 191-235.
- Erikson, E.H. 1964 *Insight and Responsibility*. New York: Norton.
- Flick, U. 1995 *Qualitative Forschung*. Humburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH. (小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳 2002 質的研究入門 春秋社)
- Holstein, J.A., & Gubrium, J. F. 1995 *The Active Interview*. Thousand Oaks: Sage. (山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳 2004 アクティブ・インタビュー せりか書房)
- Josselson, R. L. 1994 Identity and relatedness in the life cycle. In H.A.Bosma(Ed.), *Identity and Development: An Interdisciplinary Approach*. Thousand Oaks: Sage. Pp.81-102.
- 日本経済新聞. (2007/05/30). 出生数1.3台に回復.
- 日本経済新聞. (2007/06/10). 私が生んだワケ 出生率6年ぶり上昇.
- 岡本祐子 2002 成人女性のアイデンティティの危機と発達 岡本祐子(編)アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房 79-120.
- Rosenthal, G. 1993 Reconstruction of life stories. Principles of selection in generating stories for narrative biographical interviews. *The Narrative Study of Lives*, 1(1), 59-91.
- 桜井 厚 2005 インタビュー・テキストを解釈する 桜井厚・小林多寿子（編）ライフストーリー・

- インタビュー 質的研究入門 せりか書房 129-183.
- Snarey, J. 1988 Men without children. *Psychology Today*, 22, 61-62.
- 竹家一美 2005 不妊治療を経験した女性たちの語り―「子どもを持たない人生」という選択 奈良女子大学文学部人間行動科学科卒業論文（未公刊）
- 竹家一美 2007 子どものいない中年期女性のライフストーリー―転機の語りと生成継承性の様相に着目して―京都大学大学院教育学研究科修士論文（未公刊）
- やまだようこ（編）2000 人生を物語る―生成のライフストーリー― ミネルヴァ書房
- やまだようこ 2006 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念 心理学評論 49(3), 436-463.

注

- i 不妊とは、生殖年齢の男女が避妊しないで性交渉を行なうにもかかわらず妊娠しない状態である。日本産科婦人科学会では、この状態が2年間続き、これが当事者に苦痛を与える場合を「不妊症」と定義し、加療の対象としている。
- ii 本稿協力者のライフストーリーにおけるキーワードであるが、あくまでも本人の主観によるものであり、「不妊＝十字架」と断定する意図で用いられた言葉ではないことをお断りしておく。
- iii やまだ（2006）によれば、広義の言語には、身体や表情による非言語的語り、イメージや絵画や音楽や映画など視聴覚的語り、建築物、都市、風景など文化表象や社会的表象なども含まれるという。
- iv 通常、子宮の内側にある子宮内膜が別の場所にある状態。不妊の原因になるとされる。
- v 排卵日を検査し、性交渉のタイミングを指導する、基本的な不妊治療の1つ。
- vi 女性の排卵にあわせて精液から良好な精子を集め、医療器具によって子宮腔に注入する手技。

（教育方法学講座 博士後期課程1回生）

（受稿2007年9月7日、改稿2007年11月30日、受理2007年12月12日）

Interpreting the Life-story of a Woman with Infertility: "Bearing the Cross of Infertility"

TAKEYA Kazumi

This study examined the typology of self-narratives reported in my previous studies. In reconsidering those studies, I felt that I had missed some variety with respect to those narratives, as well as the unique quality of the episodes. Therefore, I reflected on how those stories revealed the reality of the storyteller. This paper interprets the life-story of a woman with infertility, based on her own narrative. I conducted sequential analysis, without segmentation, on her narrative. Wanting to interpret the entirety of her life-story, I sought to identify not only her symbolic and key words but also the meaning of her experience in relation to infertility. She regarded her infertility as a cross to bear. However, her experience of infertility changed over time, from leaving her with a sense of emptiness to becoming a source of compassion and caring. In my narrative studies, I have aimed to clarify not the replicability but, rather, the specificity of individual life-stories. This paper suggests the importance of carefully analyzing each individual person.